

Title	マス・メディアが描く中国・中国人イメージ： 『ここかへんだよ日本人』における描写を中心に
Sub Title	Images of China and Chinese appeared in the Japanese mass media, focusing on TV program series, "Kokoga hendayo nihonjin"
Author	山本, 明(Yamamoto, Akashi) 萩原, 滋(Hagiwara, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.57 (2003. ) ,p.97- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0097">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0097</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マス・メディアが描く中国・中国人イメージ

—『ここがヘンだよ日本人』における描写を中心に—<sup>(1)</sup>

Images of China and Chinese appeared in the Japanese mass media,  
focusing on TV program series, "*Kokoga hendayo nihonjin*"

山 本 明\*・萩 原 滋\*\*  
*Akashi Yamamoto Shigeru Hagiwara*

The purpose of the present paper is to investigate the relationship between images of China and Chinese depicted in TV program series "*Kokoga hendayo nihonjin*" and those held by Japanese university students. After briefly reviewing previous studies, both questionnaire survey and content analysis of TV programs, on images of China and Chinese, China-related contents of this particular TV program were thoroughly examined. It was found that, in "*Kokoga hendayo nihonjin*", (1) the images of China and Chinese presented by non-Chinese participants, i.e., Japanese and other foreigners, were mostly negative and often related to crimes committed by Chinese in Japan, and (2) Chinese participants claimed about Japanese prejudice against and unequal treatments of Chinese in Japan, as well as ignorance and biased views on the side of Japanese regarding various social issues, including the World War II. The implications of these results were discussed in relation to the China/Chinese images obtained from the questionnaire survey.

本稿の目的は、日本人の対外認識とマス・メディアが描く外国人イメージとの関係を、1998年10月～2002年3月にわたりテレビ放送されたバラエティ番組、『ここがヘンだよ日本人』（TBS系）における中国・中国人描写、および、同番組放送終了後の大学生の中国・中国人イメージを通じて検討することである<sup>(2)</sup>。

本稿では、第一に、日本人が抱く中国・中国人イメージ、日本のマス・メディアが伝える中国・中国人イメージに関する先行研究を概観する。第二に、バラエティ番組『ここがヘンだよ日本人』における中国・中国人描写を、同番組中に提示された討議トピックス、同番組における中国・中国人に関する発言内容、特に多く登場した中国人出演者の発言内容を検討することによって、明らかにすることを試みる。第三に、『ここがヘンだよ日本人』放送終了後に行われた調査結果から、大学生の抱く中国・中国人イメージを明らかにする。最後に、本稿で行った検討結果に関して、考察を行う。

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生（社会心理学）

\*\* 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授（社会心理学，コミュニケーション研究）

## 1. 日本における中国・中国人イメージ：先行研究の概観

### (1) 日本人の抱く中国・中国人イメージ

法務省大臣官房司法法制部(2003)によれば、平成14年における正規入国外国人の総数は5,771,975人であり、このうち中国(台湾)の正規入国者は909,654人(15.8%)、中国は527,796人(9.1%)、中国(香港)は136,482人(2.4%)となっている。同統計によると、正規入国者が最も多いのは韓国(全体の25.5%)であるが、中国(台湾)・中国・中国(香港)を合計すると、全外国人入国者の27.3%を占めることになり、韓国を凌ぐ構成比となる。

それでは、このように入国者が多い中国に関して、日本人はどのようなイメージを抱いているのだろうか。以下では、既存の調査結果から、日本人の抱いている中国・中国人イメージを検討する。

第一に、中国イメージの特徴として、身近さを指摘する調査報告が見られる。たとえば秋山・天野(1988)は、1987年に行ったアメリカ・西ドイツ・中国・韓国・フィリピン・ソ連のイメージに関する調査結果を報告しているが、中国イメージに関して、回答者の57%は中国は「すばらしい文化・伝統をもっている」と答えており、また41%は「近代化に努力している」、33%は「身近だ」と答えていることが明らかにされている。また、渡辺・伊藤(2000)は、アジアにおける「親しみを感じる国」として、大学生の回答者223名中、120名が中国を一番にあげ、台湾を含めると、中国に親近感を感じる学生は約60%に及んだという調査結果を示している。

第二の特徴として、中国イメージは、特に欧米やアメリカと比較すると希薄であるという指摘が見られる。秋山・天野(1988)は、日本人がはっきりしたイメージをもっているのは「欧米」、なかでも「アメリカ」であって、地理的にも民族的にも近い「アジア」の国々のイメージは今一つはっきりしないことを指摘している。また、原・塩田(2000)は、1999年に行われた日本・韓国・中国の3カ国調査の結果を紹介しているが、中国人イメージを問う質問項目において、20%以上の人から挙げられた言葉が3語しかなかったことから、中国人に関する具体的なイメージはやや希薄なようだと解釈しているのである。

しかし、中国イメージの具体化は、中国イメージの好転と同じではない。原・塩田(2000)と同じ調査に関して飽戸・原(2000)は、中国に関心があり、知り合いもいて、よく知っている、関心の高い積極層は、中国を不公平、閉鎖的、暗いと思っており、逆にあまり関心のない消極層が、中国は民主的で、平和・自由、友好的な国と持っているという分析結果を報告している。つまり、中国について知ることは、中国に関するネガティブなイメージを持つことに結びつくことがこの調査結果から示唆されている。

第三の特徴として、「中国」という国のイメージと、「中国人」という人のイメージの分離が挙げられる。原・塩田(2000)の調査結果では、中国イメージとして多く挙げられたのは「伝統的」(50.4%)、「保守的」(33.9%)、「閉鎖的」(32.3%)、「暗い」(23.1%)、「友好」(20.7%)などであり、中国人イメージとして挙げられたのは「集団主義的」(37.5%)、「勤勉」(32.1%)、「何を考えているのかわからない」(29.6%)、「規律を守る」(15.6%)、「礼儀正しい」(15.6%)などとなり、中国人イメージで特にネガティブな評価が集中しているわけではない。しかし、好き・嫌いの評価に関しては、中国人は「国としての日本よりも、人としての日本人の方がやや好き」という傾向があるのに対して、日本人は「人としての中国人よりも、国としての中国が好き」という傾向が見られることを原・塩田(2000)は報告している。

## (2) 日本のマス・メディアが伝える中国・中国人イメージ

マス・メディアは、しばしば、異文化理解につながる情報を提供したり、異文化への好意的な感情を喚起するなどして、異文化コミュニケーションを促進する。一方で、異文化についての画一的・固定的なステレオタイプを広め、強化し、場合によっては偏見を植えつけることで、異文化コミュニケーションを阻害し、誤解を拡大することもある(御堂岡, 1995, 1997)。

アメリカのマス・メディアが、マイノリティ集団をどの程度、どのように描いているかに関しては、これまでに多くの研究が行われている(例えば, Dixon, 2001; Graves, 1999; Greenberg, Mastro, & Brand, 2002などを参照)。それらの研究からは、黒人以外のマイノリティ集団(ラテン系, アジア系, ネイティブ・アメリカン)では、テレビにほとんど登場しないという傾向に改善が見られないこと(Greenberg et al., 2002), また、どのように描かれるかに関しては、人種的/民族的マイノリティは、乏しく、限定的な取り合わせの役割に限られており(Greenberg et al., 2002), アフリカ系アメリカ人に関しては、争いを起こしやすく、派手な服装で、白人社会に適応できず、失業中で、犯罪者として描かれる傾向にあること(Dixon, 2001), さらに、テレビにおける集団間の相互作用イメージは、数が限られており、いくぶん表面的であること(Graves, 1999)などが明らかにされている。

それでは、日本のマス・メディアは、中国・中国人に関して、どのような描写を行っているのだろうか。まずは既存の研究結果に触れることにする。

1985年の東京主要7局を対象として、外国要素(外国・外国人)を含む日本のテレビ番組を分析した萩原・御堂岡・中村(1987)によれば、ノンフィクション、フィクションともにアメリカが最も多く取り上げられる傾向にあり、アメリカを舞台とする場面が映し出された時間を計算すると、その次に多いイギリスの10倍近い長さとなっているという。萩原ら(1987)によると、中国に関する提示時間は130分と、アメリカの25分の1以下であるが、アジアの国々の中では最も多い。

また、渡辺・伊藤(2000)は、1997年5月の東京キー局8チャンネルに放送された海外関連番組(ニュース、ニュース・情報番組の中のマガジン番組(短い特集)を除く)のなかで、中国に関するものは、アメリカの次に多かったことを明らかにしている(全322本中、アメリカ:206本、中国:31本)<sup>(3)</sup>。

渡辺・伊藤(2000)は、中国関連番組の番組テーマを、(1)政治に関するもの、(2)経済、(3)社会、(4)歴史、(5)食文化に分類しているが、主流を占めているテーマは「食文化(料理)」と「歴史」であること、日本のテレビ番組において、中国イメージは総体的にポジティブであることを指摘している。

これらの調査報告の結果をまとめると、中国関連番組は、アメリカを除く他の諸外国関連番組と比較すると多く放送されているほうではあるが、テーマの主流は「食文化」「歴史」である。渡辺・伊藤(2000)によれば、番組テーマの中心部から少し離れた周辺情報が「中国の実像」を紹介する役割を果たし、たとえば農民の姿、サラリーマンの姿などを伝えているが、中国人の姿はそれらのテーマの周辺情報として窺えるのみであり、中国人像を直接的に提示する内容ではないと思われる。

このようなテレビ番組内容は、前節で述べたような、中国を身近に感じながらも中国人イメージが希薄であるという調査結果、あるいは人としての中国人よりも国としての中国の方が好きという原・塩田(2000)の調査結果とも、無関係ではないのではないかもしれない。

## 2. 『ここがヘンだよ日本人』(TBS 系列)における中国・中国人描写<sup>(4)</sup>

### (1) 『ここがヘンだよ日本人』(TBS 系列)の概要

『ここがヘンだよ日本人』(TBS 系)は、多数の外国人が出演し、硬軟取り混ぜたさまざまな話題に関して盛んな論戦を繰り広げるという形式のバラエティ番組である。番組終了後、2002年5月27日から6月7日にかけて行われた首都圏の大学生を対象とした調査の結果、この番組を「見たことがない」と回答した者は12.3%であり、従って9割近くが(87.7%)少なくとも数回は番組を視聴していることが明らかになった(大坪・相良・萩原, 2003)。

この番組の核となるスタジオ討議の場面には、通常、100名の外国人が参加している。その放送ごとのテーマ、各回のタイトルが決められており、それに関連するいくつかの話題を出演者の発言要旨のテロップやビデオ映像の形で次々と提示して、それをきっかけにスタジオでの議論を展開するというのが基本型となっている(萩原, 2003)。

この番組において、中国・中国人は、特に大きく扱われた外国・外国人のひとつであった。たとえば、この番組における外国人出演者の発言に関しては、「どの国・地域への言及が多いか」「どの国・地域の人々が多く発言したか」のいずれを指標としても、この番組の中ではアメリカ、中国、韓国の3カ国とアフリカがきわめて大きな比重を占めている(萩原, 2003)。

### (2) 中国人出演者による討議トピックス、中国・中国人に関する討議トピックス

スタジオにおける議論は、番組出演者が討議トピックスを提示し、その後その発言に関する議論が展開されるという構成になっている。提示される討議トピックスは、外国人出演者によるものと日本人出演者によるものと両方があるが、外国人によって提示されるトピックスのほとんどは日本人に向けられており、かつその内容は否定的であることが示されている(有馬・山本, 2003)。

渋谷・萩原(2003)は、この番組においてテーマとして言及された問題提起(スタジオ討論の小テーマ、人物ファイル、世界比較、イベント企画などにおいて、問題提起のテロップやビデオ映像で区切られた部分)を対象として、問題提起者が言及した対象国・地域(討論の過程で問題提起者以外が言及し、討論を方向づけるうえで重要な役割を果たしている国・地域を含む)に関する分析を行っているが、スタジオ討論での中国に関する問題提起(全29回)においては非好意的な問題提起が占める割合が62%(18回)と高く、好意的な問題提起は1回ときわめて少ないことを明らかにしている。

中国人出演者によって討議トピックスが提示されたのは、14回であったが、そのうち12回は日本・日本人に向けられたものであった。その内容は、日本・日本人への非難が中心となっている。たとえば、「事故にあった時、警察官から「大丈夫か?」と聞かれる前にパスポートを見せろと言われた」(1998年10月28日放送・1999年1月6日再放送, 発言者: 余婉齡)では日本の警察の差別的な待遇が、「日本人に言われた許せない言葉」という討議テーマで提示された討議トピックス「中国には電気あるの?」(1998年11月4日放送・1999年1月6日再放送, 発言者: 耿忠)では中国に関する日本人の無知・無関心が、それぞれ非難されている。

また、中国人以外の出演者によって、中国・中国人に関して討議トピックスが提示されたのは、9回であったが、そのうち5回は日本人によって、1回は番組によって、3回は中国人以外の外国人によって、提示されていた。その内容は、「中国人は言葉が汚く、人の話を聞かず、自分がすべて正しいと言い張る」(1999年9月29日放送, 発言者: ナгентラ・バハトゥール・チェトリ, ネパール)、「大量に死

刑をしてもいいんですか。」(2000年10月4日放送, 番組からの討議トピックス提示), 「ピッキング, 偽札, 強盗。日本人は中国でそんな悪いことはしてません。」(2002年2月21日放送, 発言者: 内田浩樹) など, 中国・中国人に対する非難が中心となっている。

### (3) 中国・中国人に関する発言内容

前項では, スタジオ討議の冒頭で提示される問題提起(討議トピックス)の内容を簡単に述べたが, 本項では, 討議トピックス提示に続いて行われる討論場面での, 中国・中国人に関する発言内容を検討する。

中国・中国人に関する発言内容を明らかにするため, 番組の放送内容を記述した番組構成表に基づき, 「中国」「中華人民共和国」が含まれる発言内容(討議トピックスとして提示されたものを除く)を抽出した<sup>(5)</sup>。

その結果, 対象となった発言は, 延べ262回であった。その内訳は, 中国人による発言が110回(42.0%), 日本人による発言(司会のビートたけしや, 番組ゲストのタレント等の発言を含む)が82回(31.3%), その他の外国人による発言が70回(26.7%)となっている。

続いて, 中国人による発言, 日本人による発言, その他の外国人による発言のそれぞれがどのような内容であったかを, やや恣意的にはあるが, 探ることとする。

まず, 中国人による発言においては, 犯罪・違法行為(110回中11回, 10.0%), 日本における差別(10回, 9.1%), 日中間の過去の歴史(10回, 9.1%), 性道徳(8回, 7.3%), 軍事問題(8回, 7.3%), などに関する発言が比較的多く見られた。

それぞれに関する発言内容について, 簡単に述べると, まず犯罪・違法行為に関しては, 「宝石ぬすまれたという『おたくの国じゃないの』とよく言われる。それはしょうがないと思う」(1998年12月9日放送, 発言者: 楊建雄), 「(中国人の密入国は)日本の闇社会を日本の政府が取り締まっていないから, そういうことになる。」(1999年9月29日, 発言者: 李俊)のように, 日本人が中国人による犯罪・違法行為を問題視することに関して, 発言がなされている。

また, 差別問題に関しては, たとえば石原東京都知事が「シナ人」という言葉を使ったことに関する批判が(1999年6月30日放送, 発言者: 余婉齡), 過去の歴史に関しては, 戦争のことを忘れ得ないことなど(たとえば, 1999年6月30日放送, 発言者: 楊建雄)が, 性道徳に関しては, 日本の性規範が緩やかであることに疑問を呈する発言(たとえば1999年1月12日放送, 発言者: 蘇毅)が, 軍事問題に関しては, コソボ紛争でのアメリカの中国大使館誤爆問題(たとえば, 1999年6月2日放送, 発言者: 趙曉群), 中国やアメリカの核保持に関する発言(たとえば, 1999年8月11日放送, 発言者: 楊建雄)がそれぞれなされていた。

また, 中国・中国人イメージに直接言及した発言としては, 「中国ではプロになるとある程度(生活を)保障される」という元新体操選手の意見(1999年2月17日放送, 発言者: 耿忠), 「中国人は友達になるとなんでも親しくなる」という意見(1999年3月3日放送, 発言者: 耿忠), 「相手にやられた事は同じ風に仕返す」という意見(1999年9月29日放送, 発言者: 黄芸潔), 「中国では親孝行は当たり前」という意見(1999年12月1日, 発言者: 張明霞)などが, 中国人出演者によって述べられていた。

次に, 日本人による発言においては, 犯罪・違法行為(82回中16回, 19.5%), 軍事問題(15回, 18.3%)が, 目立って多い。

具体的な内容は、犯罪・違法行為に関しては「最近中国からの密入国者が多い」（1998年10月28日放送、発言者：嵐山光三郎）といった、中国人による犯罪・違法行為を問題にする内容、中国の軍事問題としては核保有の指摘（たとえば1999年6月30日放送、発言者：猪瀬直樹）、日本の軍事問題としては日本の軍備強化に関して中国人は反対するだろうという内容（たとえば2000年1月19日放送、発言者：舩添要一）、などが発言されている。日本人出演者による、中国人イメージに関する発言としては、「中国は中華思想で独善的」（1999年8月11日放送、発言者：江守徹）といったイメージに関する直接的な言及や、「中国人が入りびたってコンビニの売上げが激減した」（1999年3月3日放送、発言者：萩原充代）のような具体的なエピソードが提示されていた。

最後に、その他の外国人出演者による発言においては、軍事問題（70回中12回、17.1%）、差別（7回、10.0%）、中国の海賊版（6回、8.6%）、過去の歴史（5回、7.1%）、日本における犯罪・違法行為（5回、7.1%）に関する内容が比較的多く取り上げられている。

それぞれに関する発言内容を見てみると、軍事問題に関しては中国の核保有への言及（たとえば1999年1月6日放送、発言者：アルビンダー・シン、インド）などが、差別に関しては、日本人が中国人を見下しているという批判（1998年11月11日放送、発言者：ノイマン・クリストフ、ドイツ）、海賊版に関しては、「何でもかんでもニセモノを作る」（2000年3月29日放送、発言者：河内マリカ、モロッコ）「中国のカーペットにベルシャ絨毯のマークをつけて売る」（2000年3月29日放送、カムラン・ゾモロディ、イラン）などの非難が、過去の歴史に関しては「日本の子はなにも知らない、たとえば何で韓国や中国の人たちが怒っているのか、その理由をいえる人が何人いるのか」（2001年5月17日放送、発言者：金武貴、韓国）などの意見が、犯罪・違法行為に関しては「あなたたち、中国人が日本にいる外国人の立場を悪くしてきた。ニュースにでるのも中国人ばかりだ。」（2000年3月29日放送、発言者：ミール・ムハンマド・レザウル・カリム、バングラデシュ）などの意見が、それぞれ述べられていた。

そして、中国人イメージについては、「言葉使いが悪く、人のマネをし、絶対人の話を聞かない」（1999年9月29日放送、発言者：ニコラ・コレッタ・ナカシマ、スリランカ）、「みんな態度が悪い」（1999年9月29日放送、発言者：サムエル・ポップ・エニング、ガーナ）、といった意見が、中国人・日本人以外の出演者によって述べられていた。

#### (4) 中国人出演者の発言内容

次に、発言回数が多かった中国人出演者を取り上げ、その内容がどのようなものであったかについて簡単に触れることにする。

中国人発言者のうち、発言した番組数が最も多いのは陳果祁（32回の番組で発言）であり、以下、楊建雄（30回）、叶森（27回）、と続いている（萩原、2003）。ここでは、陳果祁と楊建雄という、2名の中国人出演者の発言内容を見てみることにする。

まず、楊建雄の発言内容から見ることにする。

楊建雄（ヤン・ケンユウ、レストラン経営、男性、31歳〔初出時〕）は1998年12月2日の放送に初めて発言し、最後の発言は2002年3月14日の放送（最終回）であったが、最終回における発言は再放送だった。この最終回を除くと、楊建雄が最後に発言したのは2000年3月1日となり、1998年10月から2002年3月に渡るこの番組の、前半期に主として出演・発言していた中国人出演者であるといえる。

楊建雄は、さまざまな話題に関して自分の意見を述べている。たとえば、「キレル少年によるナイフ事件続発」に対して「キレルのは精神的貧困だ。」と発言（1998年12月26日）、自殺に関して、「自分の人生をプライドを持って生きようとして、もしつまづいたら、自分を守るために、死んでもいい」と発言（1999年7月14日）、資源保護の観点から問題視された割り箸の使用に関して「努力すればなくせず」と発言（2000年3月1日）している。

しかし、楊建雄が他の出演者と特に激しい論争を行ったのは、やはり、中国に関する話題、および日本における外国人に関する話題においてであるといえよう。たとえば、楊建雄は、日本の会社に対して「外国人にチャンスをくれない」と訴えるアリ・アーメッド（パキスタン・イスラム共和国）に、「我々アジアの発展途上国ももっと頑張れば日本の国民も見直してくれる」と発言し、アリ・アーメッドと激論を交わしている（1998年12月9日放送）。また、中国に関する話題では、日本の戦争の歴史に関して「それは歴史としてずっと残る。永遠に残ります。」と発言（1999年6月30日）、中国人の密入国に関して、「不法滞在はもちろんいけないがもっと良いシステム、いい法律を作ってもらえば、誰も入ってこれない」と発言（1999年7月21日）、中国の核保有に関して「（中国に核兵器を捨てろというなら）みんな捨てよう、アメリカが捨てるなら中国も捨てる」と発言（1999年8月11日）している。

この番組の最終回は、以前に放送された討論をいくつか再放送するという形式であったが、この最終回の討論は、戦争の歴史に関する楊建雄の発言、「その歴史を忘れる事は、今これからの十代でも百代でも忘れることはない」によって、締めくくられている。

楊建雄の発言からは、プライドや精神的鍛錬を重んじる態度、性道徳を軽んじることへの批判、そして、戦争の歴史を忘れず、日本の軍国主義回帰を懸念し、中国の核保有はやむなしとみなすという考えが窺える。

続いて、陳果祁（チン・カチ、会社員、男性、27歳〔初出時〕）の発言内容を見てみることにする。陳果祁による初めての発言は2000年1月19日の放送、最後の発言は2002年2月21日の放送になされており、番組の後半期に登場・発言した中国人出演者といえる。

陳果祁もまた、さまざまな問題に関して意見を述べている。たとえば、ヒモをする男性に対して「やっぱりせこい」「ちゃんと働いている皆さんは夢がある」と発言（2000年10月17日）、「女は顔じゃない」という女性に対して「顔がブスだからもてないんじゃない、あなたの心がブスなんだ」と発言（2001年4月12日）、小学生の性教育に関して「セックスの教育の前になんで人間はセックスしなければいけないのか、そういうことを教えなければいけない。」と発言（2001年5月17日）している。

また、中国に関する話題において、陳果祁は、中国の超人（食道や肺がなく頭だけで生きている人）を紹介するコーナーで超人はインチキだと言われ、「人間は、自分が信じないことを認めないだけ」と発言（2000年5月24日）、中国の大量死刑に関する番組からの問題提起に関して「誰の人権を守るかということ」「刑というもの自体が見せしめの力を持ってる」と発言（2000年10月4日）、中国人の犯罪・違法行為に関して、「なぜ日本に来て（売春を）やるかということ、中国の方が取り締まりが厳しい」「中国がしっかりしてないんじゃないじゃなくて日本がしっかりしてない」（2001年4月19日）、「なぜ中国の犯罪者がこんなに多いのかということ、中国と日本は近く、（中国は）一番近くて一番貧乏な国、こっちに来るのは当然のことだ」「日本人の警察は怠け者」と発言（2002年2月21日）している。

陳果祁の発言からは、神秘を許容する態度、中国人への差別への非難、外国人による犯罪の原因を、日本における取り締まりを問題にせず中国人に帰しているという非難が、窺える。

### 3. 日本人の中国・中国人イメージに関する調査結果<sup>(5)</sup>

#### (1) 調査の概要

ここでは、『ここがヘンだよ日本人』放送終了後に行われた、メディアと外国理解に関する調査結果を、これまでに見てきた既存の中国人イメージ調査結果、および『ここがヘンだよ日本人』における中国人描写から得られた知見を踏まえて、分析する。

この調査より、中国に関する結果としては、アジア、ヨーロッパ、アフリカにある国を5つまで自由に記入する質問において、(a) アジアに関しては中国と韓国の2カ国が特に多く挙げられていたこと、(b) 外国人イメージに関する形容詞チェックリストの結果では、中国人と韓国人は、いずれも「勤勉」「愛国心が強い」とされているが、中国人に関しては、むしろ「考えが古い」という保守的なイメージの方が目立っていること、(c) 番組を通じて提示されたメッセージに関連する内容を中心とした記述文に対して、回答者の半数以上が中国に該当するとしたのは「子どもに対するしつけが厳しい」「犯罪者に対する処罰が厳しい」「性に対する道徳や規律が厳しい」「男性優位の考えが強い」「日本が欧米化することに対して批判的」「家庭での父親の発言権が大きい」であり、全体に伝統的な価値観が支配する保守的な国というイメージが顕著になっている様子がうかがわれること、(d) 番組の中ではアメリカ人や中国人、韓国人もそれぞれに目立ってはいたが、調査で、番組視聴経験との関係が明確に現われていたのは、アフリカ及びアフリカ人に関する認識やイメージだったこと、などがすでに明らかにされている(大坪ら、2003)。ここでの分析は、同調査の中国・中国人イメージに関連のある項目(外国・外国人に関する意見、外国人イメージ、外国イメージ、態度一般に関する意見の4項目)に分析対象を限定して行ったものである。

#### (2) 結果

まず、外国・外国人イメージに関する質問項目の中の、中国・中国人イメージに関する調査結果を述べる。これらに関しては、集計結果を概観するに留める(詳しくは、大坪ら、2003参照)。

最初に、外国イメージに関する質問(15の記述のうちイメージにあてはまるものがあればマルをつけてもらうという項目)の回答結果を見てみることにする。イメージに当てはまるとして選択された割合が、アメリカ・韓国・アフリカ・ヨーロッパと比べて中国で最も高かったのは、「家庭での父親の発言権が大きい」(中国イメージに当てはまるとして選択された割合: 57.3%)、「男性優位の考えが強い」(59.1%)、「性に対する道徳や規律が厳しい」(60.6%)、「日本が欧米化することに対して批判的」(58.9%)、「犯罪者に対する処罰が厳しい」(61.6%)の5項目であった。逆にアメリカ・韓国・中国・アフリカ・ヨーロッパの中で、イメージに当てはまるとして選択された割合が中国で最も低かった項目は、「外国人に対する偏見や差別が少ない」(6.0%)、「女性の経済的地位が高い」(3.8%)、「伝統的な日本文化に対するあこがれが強い」(8.0%)の3項目であった。

続いて、外国人イメージに関する質問(20項目の形容詞チェックリスト)の回答結果を見てみると、中国人に当てはまるとして選択された割合が高かった形容詞は、「考え方が古い」(64.5%)、「愛国心が強い」(60.6%)、「勤勉」(52.3%)、「迷信深い」(46.8%)、「自己主張が強い」(41.5%)、「気性が激しい」(38.9%)、「集団主義」(37.8%)、などとなっていた。また、中国人イメージに当てはまる形容詞として、「親しみやすい」が回答された割合は8.3%のみであり、調査対象とされたアメリカ人・韓国人・中国人・アフリカ人・日本人の中で最も低かった。中国人以外と中国人とのイメージとの違いを探るため、各形容詞に

ついて、アメリカ人・韓国人・アフリカ人・日本人に当てはまるとして選択された割合と、中国人に当てはまるとして選択された割合との差を見てみると、30ポイント以上の開きが見られた項目が最も多かったのはアメリカ人—中国人間の11項目であった。一方、中国人—韓国人間においては、選択率において20ポイント以上の開きが見られた形容詞は1項目もなかった。

次に、外国・外国人に関するさまざまな意見のうち、中国人に関する意見に関する項目、「中国人は『契約精神が乏しく、国際ルールを守らない』と諸外国の人々から非難されている」、「中国人は『世界の国々はもっと中国を見習うべきだ』と思っている」「アジアやアフリカの人たちは『日本の若い女性の服装は肌を露出し過ぎる』と否定的に見ている」「中国では、犯罪に対して厳しく対処するために、死刑制度に賛成している人が多い」「アジアやアフリカの人たちは『日本人はアメリカのまねをしすぎる』と苦々しく思っている」「中国や韓国では『オリンピックで活躍した選手の生活を国が保障するのは当然』とされている」（いずれも5段階尺度で回答）に対する回答結果を見てみることにする。検定値=3（中立点）の1サンプルのt検定の結果、「契約精神に乏しい」（ $M=3.16, SD=1.09, t(2010)=6.46, p<.001$ ）「死刑制度賛成」（ $M=2.83, SD=0.94, t(2009)=-8.20, p<.001$ ）「アメリカの真似をしすぎ」（ $M=2.38, SD=1.09, t(2007)=-25.66, p<.001$ ）「五輪選手の生活保障をすべき」（ $M=2.21, SD=1.04, t(2011)=-34.05, p<.001$ ）への回答の平均値において、検定値3との有意差が見られ、「契約精神が乏しい」以外の項目においては、回答の平均値は3より有意に小さかった（すなわち、質問内容に同意する傾向が見られた）。

最後に、態度一般に関する項目（さまざまな意見に関する同意度を尋ねる15項目）のうち、外国人に関する10項目の回答結果を見てみることにする。これらの10項目の中には、中国人に関して特に指摘されることが多かった外国人犯罪に関する項目、「外国人犯罪が多いので、日本人が外国人に警戒心をもつのは仕方ない」が含まれていたが、この項目とその他の9項目との相関を分析したところ、「けちでうるさい外国人を歓迎しないのは当然」（ $r=.25, p<.001$ ）との間、「外国人はミスを認めず言い訳ばかりする」（ $r=.23, p<.001$ ）との間で、 $r=.2$ 以上の有意な相関が見られた。

#### 4. 考 察

##### (1) 『ここがヘンだよ日本人』における中国・中国人描写に関する考察

この番組は、日本人および外国人が中国人イメージを提示すると同時に、中国人出演者が、日本人や他の外国人と議論を行い、自国・自国人について述べたり、他の外国・外国人や日本・日本人に関する意見・イメージを主張する姿を提示するものであった。

中国人出演者による討議トピックス、中国・中国人に関する討議トピックスを検討した結果、中国人出演者による討議トピックスは主として日本・日本人への非難であり、中国・中国人に関する討議トピックスは中国・中国人への非難であった。

中国人出演者による討議トピックスは、主として、日本で受けた差別的な待遇を訴え、外国人犯罪に対する日本人の見解を非難するものだった。このような討議トピックスは、日本人にとっては、中国人イメージの形成というよりむしろ自省に結びつく内容であったのではないと思われる。1999年1月6日に放送された「激励・抗議の電話ランキング」という特集では、中国人出演者によって提示された討議トピックスが大きな反響を呼んだことを示している。具体的には、1998年10月28日放送の討議トピックス「事故にあった時、警察官から『大丈夫か?』と聞かれる前にパスポートを見せろと言われ

た) (トピックス提示者: 余婉齡) が「激励・抗議の電話ランキング」の第 5 位に、1998 年 11 月 4 日放送の「中国には電気あるの?」(日本人に言われた許せない言葉, トピックス提示者: 耿忠) が第 3 位に入っており、中国人への差別的な態度や、中国人を見下すような発言に関する中国人出演者による経験談は、視聴者にとって、中国人よりむしろ日本人に対する、否定的な評価を生じさせるものであったのではないかと推測される。

一方、中国人以外の出演者によって、中国・中国人に関して提示された討議トピックスは、中国人による犯罪や密入国・中国人の国民性の非難など、中国・中国人に関する否定的な側面のみを提示する内容であった。犯罪・違法行為は、中国人出演者による討議トピックスにおいても、中国・中国人に関する討議トピックスにおいても、頻繁に現われるテーマであり、犯罪・違法行為は、この番組が伝える中国・中国人イメージにとって、重要な位置を占める問題であったことが窺える。

討論における発言の内容は、討論の流れの中で発言されたものであり、討議トピックスほど明確なメッセージ性を持たない場合が多かったが、中国人出演者による発言は、主として中国・中国人を擁護する発言、および日本・日本人に対する非難から成っていたといつてよいと思われる。中国・中国人を擁護する発言としては、やはり中国人による犯罪・違法行為に対する非難を受けての発言が目立ったが、日本・日本人に対する非難としては、戦争の歴史に関する日本人の認識などが挙げられていた。また、日本の軍備強化に関しては、戦争の歴史と関連づけて述べられることが多く、非常に懸念する発言が目立った。

また、中国人出演者は、中国に関する情報を伝える以外にも、キレる少年、自殺、ヒモをする男性といったさまざまな問題に関して意見を述べていたが、それらの発言内容は、特に性道徳に関して、保守的な価値観を反映するものであったといえよう。

## (2) 中国・中国人イメージに関する調査結果の考察

中国人イメージに関する原・塩田(2000)の調査結果では、選択率の上位項目を比較し、中国・中国人イメージは韓国・韓国イメージと似通っていることを示している。本稿で述べた調査においても、中国人イメージと韓国イメージの選択率の差は少ない(いずれの項目においても 20 ポイント以内)という、両者のイメージの類似性を示す結果が得られた。また、原・塩田(2000)では、中国人イメージとして最も多く挙げられた項目は「集団主義的」であったという調査結果が明らかにされていた。本稿で述べた調査においても、中国人イメージとして 3 分の 1 以上の回答者が「集団主義」を挙げていた。しかし日本人イメージとしては、8 割以上の回答者が「集団主義」を挙げており、日本人と比較すると、中国人の集団主義イメージは薄いことが窺える。

また、中国イメージの回答結果からは、「保守的」というイメージが窺われるが、これも、中国イメージとして「伝統的」「保守的」などが多く挙げられたという原・塩田(2000)の調査結果と一致する。また、中国イメージにおいて「伝統的な日本文化に対するあこがれが強い」への回答率が低いのは、中国人が日本文化に憧れているのではなくむしろ日本人が中国文化に憧れている、とみなしていることの現れと解釈することもできるかもしれない。

さらに、中国・中国人に関するさまざまな意見への賛同の程度を尋ねる質問項目においては、「中国では死刑制度に賛成している人が多い」「五輪選手の生活保障するのは当然」に同意するという結果は、『ここがヘンだよ日本人』で提示された中国・中国人イメージと同方向の回答傾向であった。

さらに、「外国人犯罪が多いので、日本人が外国人に警戒心をもつのは仕方ない」と思う者ほど、「け

ちでうるさい外国人を歓迎しないのは当然」(外国人の拒絶)、「外国人はミスを認めず言い訳ばかりする」(外国人のパーソナリティの否定的評価)と回答する傾向が見られた。これは、外国人一般に関する質問項目ではあるが、犯罪と関連づけて描写されることが多かった中国・中国人イメージにとって特に意味を持つ結果であると思われる。

### (3) 総合的考察

『ここがヘンだよ日本人』における中国・中国人描写は、中国人を犯罪と関連づけて提示することが多かった。そしてそれは、日本人出演者と、中国人以外の外国人出演者によって中国人犯罪を非難するという内容と、それに対する中国人出演者の反論からなっていた。その他の発言内容も、主として中国人を、独善的で、言葉使いや態度が悪いと描写していた。このような中国人イメージは、渡辺・伊藤(2000)が中国関連番組が伝えていると指摘しているような、主として「歴史」「食」に関する、ポジティブな中国イメージとは、非常に隔たりのあるものである。

「歴史」「食」関連番組が伝える、表面的だがポジティブな中国イメージと、犯罪と関連付けて語られる中国人イメージとのギャップは、『ここがヘンだよ日本人』において、「中国っていつから売春なんかやるようになったの？ だってさ、中国って悠久の歴史をもってさ、そういう国だったじゃない。」(2001年4月19日放送, 発言者: そのまんま東)という発言に端的に示されている。

前述のように、日本人にとって中国という国は、歴史があり、身近な国であるが(秋山・天野, 1988)、中国人に対する好意度は、中国という国に対する好意度よりやや低い(原・塩田, 2000)。また、鮑戸・原(2000)によれば、中国に関心の高い積極層の方が、中国に関してネガティブなイメージを持っている。それは、歴史や食以外の中国関連情報が、主として、中国、特に中国人に関するネガティブなイメージを伝えているからであるかもしれない。

仮に、中国人による犯罪が起こっていると、それは「中国人は法を犯す」という信念を正当化するものではない。2000年12月26日の朝日新聞夕刊の第一社会面記事(見出し:「中国人かな、と思ったら110番」警視庁のビラ, 抗議で回収)では、警視庁地域部が東京都内各所に配った防犯チラシに「中国人かな、と思ったら110番」「建物内で中国語で話しているのを見かけたら110番」との表現があり、「配慮に欠ける」との指摘を受けた同部がこれを回収するという出来事があり、中国大使館より「在日中国人の一部に犯罪者がいるのは確かだが、すべてが犯罪者の目でみられる恐れがある」などとして、外務省に抗議するとともに再発防止を申し入れた、と報じている。

しかし、前述のように、この番組は、日本人にとって、在日外国人の置かれている状況について考えさせられるような内容をも含んでいた。また、この番組の討論部分は主として非好意的な問題提起が多かったが、「在日外国人ファイル」などの討論以外のコーナーでは、外国人が好意的に描かれる場合も少なくなかった(渋谷・萩原, 2003)。

『ここがヘンだよ日本人』では、日常生活において外国人と身近に接触しない日本人にとっても、毎週のように同じ外国人出演者を見たり、その意見を聞いたりする機会を提供する番組であった。今後、日本にますます多くの外国人が訪れるようになったとき、私たちは多様な文化的背景を持つ人々と、ごく日常的に接することになるかもしれない。スタジオ内のさまざまな国籍の外国人による討論の様子を追ったこの番組の内容を明らかにすることは、マス・メディアが伝える外国・外国人イメージを明らかにするだけでなく、今後到来するかもしれない日本の将来像を知る手がかりとなるかもしれない。

## 注

- (1) 本研究は、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所を母体とした「メディア・ステレオタイプینگ」研究プロジェクト(代表 萩原 滋)の一部を構成するものである。2001年度から3年の予定で開始された同プロジェクトに対しては、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所の研究・教育基金の他、放送文化基金(2001年度)及び文部科学省の科学研究費(2002-2003年度)を受けている。
- (2) なお、本稿では、便宜上の理由から、台湾を含めて「中国」と呼ぶことにする。
- (3) ただし、渡辺・伊藤(2000)は、対象番組の放送時期が1997年7月の香港返還を控えた時期であり、そうした特別なタイミングを考慮に入れる必要についても言及している。
- (4) 『ここがヘンだよ日本人』での中国・中国人描写の検討は、番組の放送内容を記述した番組構成表に基き行った。番組構成表とは、スタジオの議論に関して、ひとりの発言を基本単位として、発言者の属性と共に、その内容を要約あるいは逐語的に記述したものである(詳しくは萩原, 2003)。
- (5) ただし、中国人出演者に対する「中国の方」などの呼びかけ等、「あなたは中国のどこから来たの?」などの問いかけ、「私は中国で新体操のナショナルチームの選手だった。」などの個人的なエピソードは、対象から除いた。また、番組構成表において、まとまった発言ではない言い争いとして処理されたものも、対象から除いた。また、中国人出演者に対する、「あなたの国は…」などの発言は、中国人出演者の発言の前後の発言内容を調べることによって、可能な範囲で対象とした。
- (6) この調査における回答者・質問項目等や分析結果に関しては、大坪ら(2003)、上瀬・萩原(2003)、大坪・萩原(2004)を参照してほしい。

## 引用文献

- 秋山登代子・天野千春 1988 日本人の国際意識—10月国民世論調査から NHK 放送研究と調査, 38 (5月号), 2-21, 71-77.
- 鮑戸 弘・原 由美子 2000 相手国イメージはどう形成されているか—日本・韓国・中国世論調査から (その2) — 放送研究と調査, 50 (8月号), 56-93.
- 有馬明恵・山本 明 2000 『ここがヘンだよ日本人』で描かれた日本人ステレオタイプの分析 メディア・コミュニケーション, 53, 49-64.
- 朝日新聞社 2000 「中国人かな、と思ったら110番」警視庁のピラ、抗議で回収 2000年12月26日夕刊第一社会面記事.
- Dixon, T. L. 2001 Social cognition and racial stereotyping in television: Consequences for transculturalism. In V. H. Milhouse, M. K. Asante, & P. O. Nwosu (Eds.) *Transcultural realities: Interdisciplinary perspectives on cross-cultural relations*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, pp. 215-224.
- Graves, S. B. 1999 Television and prejudice reduction: When does television as a vicarious experience make a difference? *Journal of Social Issues*, 55, 707-725.
- Greenberg, B. S., Mastro, D., & Brand, J. E. 2002 Minorities and the mass media: Television into the 21st century. In J. Bryant & D. Zillmann (Eds.) *Media effects: Advances in theory and research*. (2nd ed.) Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, pp. 333-351.
- 萩原 滋 2003 『ここがヘンだよ日本人』: 分析枠組みと番組の特質 メディア・コミュニケーション, 53, 5-27.
- 萩原 滋・御堂岡 潔・中村雅子 1987 テレビの中の外国・外国人—日本のテレビにあらわれた外国要素の内容分析— 新聞学評論, 36, 57-72.
- 原 由美子・塩田雄大 2000 相手国イメージとメディア—日本・韓国・中国世論調査から— 放送研究と調査, 50 (3月号), 2-23.
- 法務省大臣官房司法法制部(編) 2003 第42 出入国管理統計年報 平成15年版 国立印刷局
- 上瀬由美子・萩原 滋 2003 ワールドカップによる外国・外国人イメージの変化 メディア・コミュニケーション, 53, 97-114.
- 御堂岡 潔 1995 異文化間マスコミュニケーション 渡辺文夫編 異文化接触の心理学 川島書店, pp. 121-132.
- 御堂岡 潔 1997 異文化コミュニケーションの基礎知識⑥ マス・コミュニケーション 石井 敏・久米昭元・

- 遠山 淳・平井一弘・松本 茂・御堂岡 潔編 異文化コミュニケーション・ハンドブック 有斐閣選書, pp. 78-82.
- 大坪寛子・萩原 滋 2004 『ここがヘンだよ日本人』(TBS系)の番組視聴効果の持続性に対する検討 メディア・コミュニケーション, 54, 75-93.
- 大坪寛子・相良順子・萩原 滋 2003 調査結果に見る『ここがヘンだよ日本人』の視聴者像と番組視聴効果 メディア・コミュニケーション, 53, 77-96.
- 渋谷明子・萩原 滋 2003 『ここがヘンだよ日本人』で描かれた外国人イメージ 人間と社会の探求(慶應義塾大学社会学研究科紀要), 56, 1-19.
- 渡辺光一・伊藤恭子 2000 日本のメディアの伝える中国イメージ—1997年のテレビ番組の分析— 川竹和夫・杉山明子・原 由美子・櫻井 武(編) 外国メディアの日本イメージ—11カ国調査から— 学文社, pp. 119-124.